

## 審査の結果の要旨

氏名 ランジャナ・ムコパディヤーヤ

ランジャナ・ムコパディヤーヤ氏の学位請求論文「日本における「社会参加仏教」の展開——法音寺と立正佼成会の事例——」は、近代日本の仏教の社会参加のあり方の全体を視野にいれながら、二つの仏教系新宗教教団、法音寺（仏教感化救済会）と立正佼成会について詳細な事例研究を行い、社会参加仏教の理論の洗練を目指したものである。まず、近代社会における宗教の位置に関する宗教社会学的な諸理論が検討され、宗教の公的な機能の縮減を説く世俗化論と回復を説く公共宗教の理論とが対照される。著者はこの対立が多面的な状況の下での宗教の公的機能をうまく理論化しえていないことによるとらえ、近年、世界的な仏教研究の中で用いられるようになってきた「社会参加仏教」の概念を用いて、ゆきづまりを打開していく道を示そうとする。

これまでの社会参加仏教の概念が抱える問題点、とりわけ近代の現象として理解するかどうかという問題を丁寧に検討した上で、著者は「国家化・国家主義化」「社会化」「大衆化」「国際化」の4つの指標を提示し、そこに近代的な「社会参加」の具体的な形態を読みとっていく。機能分化し多元化した社会で、宗教集団が集団内での私的信仰生活の領域を超えて、外部社会の問題に参与していく様態が社会参加の諸相と理解される。法音寺（仏教感化救済会）の場合は、杉山辰子らによる1900年代の布教活動開始当初から社会的な弱者への支援に大きな力が注がれ、それは次第に専門的な社会福祉機関の形成へ、そしてさらには福祉教育機関の形成へと発展していく。他方、1930年代に庭野日敬らによって形成された立正佼成会の場合は、国家のための社会活動というパターンから出発するが、1960年代に国際的な平和活動や地域での多様な社会活動への参与に力を入れるようになり、信徒自身が多様な社会活動に関わるパターンを形づくと論じられる。

どちらの場合も、法華経の慈悲や菩薩行の理念に動機づけられているが、杉山や庭野のそれぞれの社会活動を動機づける教説の分析はこれまでの新宗教研究にはなかった深度をもつ。また、信徒が社会参加の宗教的な意義をよく自覚していることは、それぞれの教団の信徒に対する質問紙調査によって確認される。国家化・社会化・大衆化・国際化という点での社会参加仏教の特徴が、信徒の意識にどのように現れているか、堅実な調査によって検討されている。そして、最後に近代の公共圏における宗教の位置という観点から、社会参加仏教の分析がどのような知見を提示しているかが論じられている。

宗教社会学的な理論とフィールドワークによる調査研究が総合され、近現代の仏教理解、宗教理解の新しい分析枠組みが提示されており、刺激的な業績である。質問紙調査が必ずしも成功しておらず、そこから見出される論点が弱いうらみがあるが、日本の近代宗教と現代宗教の宗教社会学的研究に新しい地平を開く試みとして成功している。よって本論文は博士（文学）の学位を授与するにふさわしい業績であると判断する。